

藝文

第貳拾年第六號

它と也、益と盍、昏と昏との辯

大 島 正 健

一、它と也

它と也とは屢々同音同義に用ゐらる。它是古文象形にして蛇の形なり。後它是自他の他の義に假借せられ、它に虫扁を添へ、蛇と爲して、これが區別を立て、又自他の它是之に人扁を添へて佗と爲し、更に又它を也に改めて他に作るに至れり。它と也とは古文相似たり。故に蛇も亦虵に作れるを見る。高田竹山氏の説に也は漢代の作字にして它の後出異文なり、説文也を以て女の陰の象形と爲すは取る可からずと。此説従ふべし。它是匚に假借せられたること多けれど、仁中の也は、本來它なりと知るべし。它と也とは其古文に小異あるのみにて、同音同義として用ゐ居られたるが、後世兩字別々の形を取りて、共に相存するに至れるなり。

也。は今一般に人の知るが如く、助語として用ゐらる。是れ漢以前に、此字と同作用を爲したる毆の字又兮の字の音を假借したるなり。後世に至り、又也を征に作りたる場合あり、送、跽、酖、駢、陀を迓、跽、酖、駢、陀の形にて表はすが如し。征は獨立語として、用ゐられたることも無きに非ざれど、遙かに後世の用法なりしと見えて、普通の字書には見當らず。

既に它と也と其象形には小異あれど、同音同義として使用せられ居ることを承認する以上は、其原文の異同を論ずると共に、其音の異同を論ずる者無きは、大いに之を怪しまざるを得ず它と也と、後世の如く分れ來りたる兩字の、其古音の相通じ居りたるものなりと云ふこと、事實なりとせば、改めて之を研究すること、必要の問題と爲るなり。

也。は毆。又兮。と同義に用ゐられたること既に述べたるが如し。毆は唐韻於計反。兮。は唐韻胡鷄反にして、共に喉音に屬する字なり。胡鷄の胡は匣母に屬するが故、我假名の如く、コに作らずして、出氣性のオと呼ぶこと、本音に近かるべし。今音毆は去聲のエイ、兮は平聲のエイの類なれと、兩字共に其古音はヤに近き音なりしが如し。是より推して上記の兩字に通ひたる也。には、古來ヤの音ありたるものと見ることに、當然

の歸着なるべし。々」と通ふは、古今の時代の差異を問はず、何れの國に於いても、行はれ居る所の轉音なり。今試に也の古音に、*ya*の音と、*ja*の音と、轉換ありたるものと假定し置くべし。

它の古音は、直拗何れの音なりしか、判じ難きも、假りに拗音のㄅなりしとせば、它と也と通じたること、敢て怪しむに足らず。是に由りて它の他と爲り、蛇の虵と爲り、陀の陀と爲り、迤の迤と爲る類は、容易に説明し得べし。ㄅの古音は舌音なりしか、齒音なりしか、未だ詳かならず。舌音としては、拗音のヂヤ(*dia*)より、直音のダ(*da*)に移りたる者多きが如し。此類の者の多數は今直音と爲りて、歌、哿、箇の韻の一部を組成するのみならず、又濁音より清音に移りたる者も、亦其數多し。古音にては、直拗の兩音又清濁の兩者の相轉換すること、其間に嚴正なる制限無かりしが如し。錢大昕が所謂古音に拗音無しとの説は、深く信賴するに足らず。

蛇は唐韻食遮反にし、麻の韻に屬す。此字六朝の中期の、歌、麻兩韻の分裂の時に際し、歌の韻の直聲より轉じて、麻の韻の拗聲に移りたるものなるか、或は又佳の韻所屬の者と共に、古音の拗聲を持續して下り來れるものなるか、未だ能く判明せず。蛇は齒音にて我音ジャなり。漢音にて之をダと讀むこと、其の據る所を知らず。

它と也、益と盡、昏と昏との聲

歌哥、箇の韻所屬の者の一部は、後漢の頃よりア、エ、イの母音變化を以て、六朝の時代まで下り來りて、支、紙、寘の韻所屬の者の一部を組成したる者あり。其中には它と也との轉換を示す者多し。

蛇は虫に従ふ它的聲なり。此字又蚰、蛭に作る。蛇に廣韻、弋支切移の音あり。詩の召南、羔羊に、羔羊之皮。素絲五紵。退食自公。委蛇委蛇とあり。是れ今音を以て古音に律し難き、古韻の一例なり。委蛇をキイと讀むべきか、然るときは、皮のヒとは相叶へど、紵のダとは韻を爲さず。蛇をジャ又ヤと讀み、皮をハに作るときは、皮、紵、蛇の三字其聲能く相和す。委蛇委蛇はキイキイと讀まずして、古音に擬してツヤツヤと讀むこと、緩々と紆り行くが如き、從容自得の貌を表はすに適するに似たり。蛇の音ヤ、エ、イと變はり來る。

迤は行く貌なり、唐韻徒何反、迤に同じ。迤迤又共に弋支切にして、委蛇の蛇に通ず。此字又迤に作る。迤にダとイとの兩音ありて、歌と支との兩韻に入る。音變化の説明蛇に同じ。

匱は盥器なり。也の本字は它なり。其音唐何切より弋支切に移ること、蛇迤の音の變化に類す。

右の蛇[○]送[○]匪[○]の類は拗音のヂヤ、又ジャよりヤに移りたるものと推定す。

池[○]の古文は沱[○]にして古へ池[○]の字無し。沱[○]は唐韻徒何反にして我音ダ、池[○]は廣韻直離

切にして我音ヂなり。此字ヂヤ、ヂエ、ヂを變化し來れるを見る。漢音は清なり。

池[○]は又沱[○]に作る。

地[○]は土に従ふ也[○]の聲なり。也[○]の本字は它[○]なり。地[○]は廣韻徒四切にしてヂの音なり。

當然眞の韻に屬す可かりしを、至の韻に收めたるは其聲の稍轉じたるなり。此字も亦ヂヤ、ヂエ、ヂと轉じ來る。漢音は清なり。

馳[○]は馬に従ふ也[○]の聲なり。也[○]の本字は它[○]なり。廣韻直離切なり。此字も亦它[○]の音を傳へて、ヂヤ、ヂエ、ヂと其音を轉ず。漢音は清なり。

弛[○]は弓に彼[○]ふ也[○]の聲なり。也[○]の本字は它[○]なり。唐韻施氏反、廣韻施是切、我音シなり。

此字に、シャ、シエ、シの變化あり。我古音はセなるべし。廣韻の施[○]是切を後漢音に當つるときは是にゼの音あるを以て之を證することを得べし。吳音即ち古音にてはシエをセにて寫せり。弛[○]の音のヂヤよりシャに移りしは、舌齒兩音の往來なりと知るべし。

施[○]は説文に扌[○]に従ふ也[○]の聲とあり。方[○]は扁[○]にして缶[○]は旁の如く思はるれど、也[○]の聲

なりと云ふに至りては、音注には別條なし。唐韻弋支反にして、我音シなり。此字の音シヤ、シエ、シと變はり來る。我古音はセなり、是れシエの轉なり。後漢の中期より、六朝の初期に互る時代の音なりしと知るべし。

二、盍と盍

盍は説文に覆なり、血に従ふ大の聲とあり。大は音義を兼ねたるなり。唐韻胡臘反なり。此字に大の聲のありたるべきは、盍に胡太切の音あるを以て、之を證すべし。盍は盍に作る。又發聲の語としては、何不の音義を當て、曷に通ず。曷は舌音の入聲として、去聲の大の聲と相叶ふ。盍の入聲には、屑韻舌韻の往來あるなり。盍の入聲も亦屑韻なり。

盍は盍と音義全く異なる所無し。案するに字形の轉じたるものなるべし。去の本字は盍なり。盍の字の皿の上にある太は盍に似たるより、隸書にて其形移りて、遂に去と爲りたるものと推定す。盍も亦盍に作る。

右の解説に基き、左の字の音を考ふべし。

劫は説文に人の去らんとするを力を以て止むるを劫と曰ふ、力去に従ふとあり。是

れ會意の注なれど、甚だ要領を得ざる牽強の解釋なるが如し。而して此類の字の入聲に、共に唇韻に入れる者あるを説明せず。劫は唐韻去怯反、集韻訖業切なり。此字劫に作り又脅に通ふ。愚案太は盍の省にして、其音を代表す。随つて其轉字の去も亦其音を保持す。劫の去は元來去ルといふ字に非ずして太の轉形なり。劫は力に従ふ太。即ち盍の聲にして、今音は稍其聲の轉じたるなり。故に劫は會意に非ずして諧聲の字なり。

怯は説文に畏多きなり、犬に従ふ去の聲とあり。唐韻去劫反、怯の本字なりとす。此度は去の聲とあれど、其實は唇韻の入聲なり。怯怯の去も亦去ルの去に非ざること明白なり。此去も太の轉形と見て、始めて能く説明し得るなり。

三、昏と晡

昏は説文に日に従ひ、氏の省に従ふとあり。是れ會意にして、日の低く沈むを表はすなり。唐韻呼昆反なり。

晡は昏の別字なり。兩字製作の前後につき兩説あり、或は晡を以て俗と爲し、或は昏を以て俗と爲す。其當否は姑く措き、晡は漢時代より既に行はれ居りたるものゝ

它也、盍と晡、昏と晡との辯

如し。昏は日に從ふ民の聲なるべし。康熙字典に唐本說文民の省に從ふ、徐本氏の省に從ふ、晁之を補して曰く唐の諱に因り民を氏に改む、則ち昏は俗字に非ざるなりと。民は其母音オイン又ヨインの聲なりしが、六朝の初期に至り、オインの聲よりオンの聲出で來れり。昏昏のコンの聲と爲りしは此時代なり。因の聲より恩の聲の出で、申の聲より坤の聲の出でたるは民の聲より昏の聲の出でたると同様の例なり。

昏に從ふ婚悟と昏に從ふ婚悟と亦同音同義なり。此等の諸字は其聲符の昏昏と同音なるに由り、特に注を附する要無かるべし。

緡は錢貫なり、又緡に作る。廣韻、武巾切にして音民なり。緡の聲符の昏より、民の音を得ること稍困難なり。然るに緡の聲符の昏は其儘之に叶ふ。昏は日に從ふ民の聲なればなり。緡の聲符の昏は、其聲符の民を難れて、魂の韻に移りたれど、緡は尙其古音を保ちて之に伴はず、民の音を持續して、緡と民と其變化を共にしたるなり、更に參考として、同じく啓を聲符とする、啓を擧ぐべし。此字廣韻眉頌切にして、啓の音あり。民は隋唐音としては、今音の如く定まり來りたれど、古韻には眞諄の韻より痕魂の韻に移るが如き、變化ありたるなり。

因つて考ふるに、昏は元來俗字に非ず。却て昏の氏を氐の省と爲すこと、疑ふ可き所あるに似たり。昏は唐の諱を避けて民を氏に作り、昏に改めたりと曰ふ説是なるが如し。此類に屬する艮を聲符とする者、根と爲り、銀と爲り、限と爲り、眼と爲るを見れば、民を聲符とする昏の、其聲を轉するに至りたるも、別に怪しむに足らざるべし。